ビルマの夢は何処へ

福田 幸正 グローバル・グループ 21 ジャパン (公財) 国際通貨研究所 客員研究員

Thant Myint-U, 2019, The Hidden History of Burma: Race, Capitalism and the Crisis of Democracy in the 21st Century, Atlantic Books

本著は、21 世紀に入りにわかに民主化の動きが進んだビルマを、歴史家でありインサイダーでもあるビルマ人の著者の目を通して綴ったものである。私見を交えて以下にご紹介したい 1 。

著者のタンミンウーは、第3代国連事務総長のウタントを祖父にもつ歴史家である。カンボジアやバルカン半島での国連平和維持活動に携わった経験を有する。ビルマが軍政から民政に移行する際には政府のアドバイザーを務めた。現在では、ウタントの住まいを博物館兼教育施設にしたウタント・ハウス(U Thant House)と、ヤンゴンの歴史的建造物の保存活動を行う財団(Yangon Heritage Trust)を主宰している。なお、タンミンウーは本著に限らず自分の国を一貫してビルマと呼んでいる。それは、歴史家としても長年慣れ親しんだ国名というのが主な理由、と述べているが、1989年に当時の軍事政権が政治的理由で国名をミャンマーに替えたことへの反発もある。本書評でもビルマとした。

1992年から軍事政権を率いたタンシュエ大統領は、引退(2011年3月)を控えて自身と家族の保身が心配になりはじめた。それが、それ以前から軍によって模索されてきた民政への移管を早めた。中東の独裁者が次々と権力の座から引きずり降ろされた「アラブの春」(2010年~)も追い風になった。タンミンウーは、特に2011年、2012年のビルマは、あたかもそれぞれ異なる軌道を回る惑星が、ピタッと一列に並ぶような、数々の奇跡的幸運に恵まれた年だった、と形容している(alignment of stars)。

テインセイン大統領とアウンサンスーチーとの直接対話の実現(2011 年。軍人のテインセイン大統領と、建国の英雄・国軍創設者のアウンサンを父に持つアウンサンスーチーは、両者とも根っこは生粋のナショナリストだ)。米国の後押し(2011 年クリントン米国務長官訪緬、2012 年オバマ米大統領訪緬)。欧米の経済制裁解除(2012 年から)、など。そして 2015 年、総選挙を経て晴れてアウンサンスーチー率いる NLD (National League for Democracy 国民民主連盟)が政権を担うことになった。ところが、いつ軍が陰謀を仕掛けてくるのかと NLD が怯えながら全く未経験の国家運営に手を付け始めたまさにその矢先、これまでの幸運続きから一転して大きな禍がビルマを襲う。ロヒン

¹ タンミンウーの 2006 年の著書 *The River of Lost Steps: Histories of Burma* に対する浅沼信爾氏の書評(「ミャンマーの熱い季節」)は、SRID ジャーナル第 2 号(2012 年 1 月)をご参照いただきたい。

http://www.sridonline.org/j/doc/j201201s06a03.pdf#zoom=100

ギャ問題だ。長年くすぶっていたこの問題の決着を図るため、2016 年 8 月、アウンサンスーチーは軍の反対を押し切ってまでして、元国連事務総長のコフィ・アナンにロヒンギャ問題の調査と解決案の提示を求めた。ロヒンギャへの国籍付与の検討をも含む包括的なコフィ・アナンの提案(2017 年 8 月 24 日公表)に対して、アウンサンスーチーはその全面的な順守を約束した。

しかしその翌日の8月25日にアラカン・ロヒンギャ救世軍(ARSA ベンガル系イスラム教徒反政府武装組織)による軍・警察施設に対する同時多発襲撃が起こり、それによって軍・警察のロヒンギャ住民への大規模な迫害が始まり、70万人という世界最大規模の難民問題となった。このような形でロヒンギャ問題解決の糸口が葬られたことは実に不運だ。アウンサンスーチーは、ロヒンギャの人道危機に対して実質的な国家元首としての責任を果たしていない、と糾弾され、あれだけ国際社会から民主化の旗手として持ち上げられてきた名声は地に落ち、さらにビルマ政府は、国際刑事裁判所からロヒンギャの人々に対してジェノサイドを行ったとして提訴されるに至った。しかし、アウンサンスーチーは、このような国際社会からの糾弾に動じることなく、長年自分を軟禁状態に置いてきた国軍を擁護する立場をとった。彼女は2011年のテインセイン大統領との初の直接会談で、国益のために国軍と共存するという政治家としての冷徹な決断をしたのだろう。ロヒンギャ問題だけではなく、一時和解の方向に向かっていた他の民族とも、ここにきて武力衝突が再燃している。その他、急速な自由化による格差の拡大、気候変動の影響(中部地域の旱魃、沿岸部の海面上昇)、そして北に国境を接する中国の怒涛のような進出が、同時にビルマを激しく揺さぶっている。

政権に就いた NLD は、早速民主化の流れの中でテレビ中継されることになった国会での答弁の矢面に立たされ、皮肉にも軍政を支えてきた官僚やテクノクラートに発言要領の作成を依存しなければならないことになった。今でも影で実権を握っているのは軍政を生き延びた役人たちかもしれない。 NLD の活動家がいかに献身的であっても民主化を叫ぶことしかできなければ実際に国を運営することはできない。彼らは国づくりのビジョンと方法をいまだに編み出していないのだ。そのような危機感を抱いたタンミンウーは、あらためて国民レベルの真剣な議論を提唱している。ビルマ国民はビルマをどのような国にしたいのか、と。タンミンウーは、特に経済のあり方についての議論が希薄なことを危惧している。民主化より一足早く、経済は80年代末頃から社会主義経済から自由市場経済へと移行し始めたが、闇経済がはびこることになった。今ではミャンマーの辺境地域は覚醒剤の一大密造拠点となっているように、違法経済活動(希少動物や鉱物の密貿易を含む)が野放し状態であり、それが犯罪組織や武装組織を潤し社会を蝕んでいる。

それでも確かにビルマは軍政時代に比べればはるかに豊かになった。大型ショッピングモールが無数開店した。言論の自由も格段に改善したし、インターネットなどには規制はない。スマホはほぼ100%普及した。しかし、タンミンウーは問いかける。これが本当に人々が長年求めてきた民主的な国の形なのか、と。また、外患内憂に直面するビルマであればこそ、いまだに国民の間に軍政時代の記憶が生々しく残っているとしても、敢えて新たな意味での強い国家を標榜すべき、と主張している。さもなければビルマはアジアの中で一人破綻国家に転落する、と警鐘を鳴らしている。タンミンウーも憂国のナショナリストだ。そして本著をこう締めくくっている。

"Perhaps, most of all, Burma needs a new project of the imagination."

タンミンウーは本著の出版後、世界各地で講演を精力的に行っている。コロナ下でのオ

ンライン討論でも他の参加者を圧倒している。ロヒンギャ問題でビルマが世界の非難を 浴びる中、タンミンウーの流暢な英語と穏やかな語り口はビルマという国の複雑さを強 く印象づけるだけではなく、ロヒンギャ問題を相対化、さらには等閑視化させることに さえも成功していると思われる。

以上で本著の書評を書き終えようと思ったが、ひとつひっかかることがある。ビルマに好意を寄せる日本人は多い。日本は官民とも長年にわたりそれぞれの立場で多大な支援をビルマに行ってきたが、本著では日本に関する記述が少ない。そんな中で、「ミャンマーの国民和解担当日本政府代表」(2013年2月)に任命された日本財団会長の笹川陽平氏について紹介されているが、Yohei Nishikawa となっている。笹川良一氏も Ryoichi Nishikawa となっている (P.177)。これはいただけない。それでも敢えてタンミンウーを擁護するとすれば、タンミンウーは日本だけを冷淡に扱っているわけではない。これまでビルマに介入したすべての外国勢を等しく淡々と扱っている。それに、このタイミングで出版された本著の主なターゲットは、親ビルマの日本ではなく、ロヒンギャ問題でビルマ批判がおさまらない欧米だ。

2020 年 11 月 8 日に総選挙が行われた。大方の予想通り NLD が単独過半数を維持した。NLD 政権は、50 年間続いた軍政の後にできた政権担当初体験の民主政権だ。これまでの 5 年間はいわば猶予期間。次の総選挙までの 5 年間で結果を出すことが求められよう。アウンサンスーチーはいまだに国民の高い支持を得ているが現在 75 歳。有力な後継者は見当たらない。内外に多くの難題を抱えながら今後の 5 年間が正念場だ。

新型コロナウイルス拡散防止のため選挙運動が制限されたこともあり、比較的に静かな選挙になったようだ(治安悪化を理由に一部の選挙区での投票が見送られた)。2015年の総選挙からわずか 5 年で熱い政治の季節は終わったのだろうか? 今後タンミンウーのいうような国民的な議論が起こるのだろうか? それとも、ビルマ国民はタンミンウーの議論についていけず、結局タンミンウーは国民から浮いた存在になってしまうのだろうか? そして、ビルマはこれからどれだけの時間をかけて、多様性(公認民族数だけでも 135)を包摂する寛容な国民国家になっていくのだろうか? ビルマの国づくりは現在進行形である。

これらは勝手にビルマという国とそこに暮らす人々を好きになった一外国人の無責任な独り言に過ぎないが、ビルマの行く末はやはり気になる²。

「唯一無二の伴走者としてのドナー」第18号、2020年1月

http://www.sridonline.org/j/doc/j202001s07a01.pdf#zoom=100

「ミャンマーの春」第3号、2012年8月

http://www.sridonline.org/j/doc/j201208s03a01.pdf#zoom=100

² 評者がミャンマー関連で SRID ジャーナルに寄稿したエッセー、書評は次の通り。「変わるもの、変わらないもの: (おそらく最後の) ミャンマー出張を中心に」第 19号、2020年 7月 http://www.sridonline.org/j/doc/j202007s06a01.pdf#zoom=100